

日本社会福祉系学会連合
2015年10月17日開催日本社会福祉系学会連合公開研究会報告
「災害福祉学の構築—支援者支援を考える—」

日本社会福祉系学会連合 運営委員 大島隆代

東日本大震災からもうすぐ五年になろうとしている。学会連合では2011年度より、震災関連の実践および研究成果を発信するためにシンポジウムや研究会を開催してきた。その間、災害福祉に関する文献等をリスト化していく災害福祉アーカイブの作成も進めてきた。本年度は、これまで学会連合が取り組んできた災害福祉学の構築に向けてという研究事業の一環として、支援者支援を考えることを課題に、2015年10月17日に、東洋大学白山キャンパスにおいて公開研究会を開催した。

研究会の前半では、お三方より発題があり、日本社会事業大学の藤岡孝志氏からは「被災地における援助者支援について—特に共感披露に焦点を当てて—」、埼玉県立大学の梅崎薫氏からは「震災後の東北三県における社会福祉士、精神保健福祉士に対する調査結果から」、公益財団法人ときわ会常盤病院のソーシャルワーカーである鈴木幸一氏からは「被災地での内部支援と外部支援を考える—支援する側受ける側、両側面を経験して—」というテーマでお話いただいた。

被災地で実践をしている専門職への調査を実施した藤岡氏と梅崎氏からは、調査的アプローチを行うことの難しさを抱えながらも、丁寧な分析から得られた知見をお示しいただいた。現地で活動する専門職へも被災地外部から派遣される専門職へも、スーパービジョンの機能のあり方を見直すことや、ケースカンファレンスの重要性、支援者の派遣体制の整備や、専門職養成教育の課程において支援者支援を学ぶことの必要性も提言された。鈴木氏は福島県内の病院のソーシャルワーカーとして、組織内での危機管理と外部支援者の受け入れの両側面を経験された。鈴木氏は、現在も被災したかたがたの生活再建や復興への道程が長期化している状況において、さまざまな人たちへの個別性を重んじた支援という、まさにソーシャルワークの根幹をなす部分を、どのように外部支援にも担ってもらうかを考えていくべきであるという課題を示された。

研究会の後半では、会場の参加者からの質問に応答する形で議論を進めていったが、被災地での支援者、研究者、支援者派遣を継続している組織のかた等、さまざまなお立場からの活発な発言からは、今回のテーマへの関心の深さと、今後取り組むべき課題が多様であることを再確認させられた。この公開研究会の詳細な報告については、学会連合ホームページをご参照されたい。http://jaswas.wdc-jp.com/pdf/H27_report_01.pdf

援助者支援・支援者支援を考えていくというテーマは、やり甲斐や達成感といったものが専門職としての成長につながることもあるという社会福祉の実践領域であるからこそ、さらに研究が深化し体系化されていくことが望まれる。また、今回の研究会のように思いのある人たちが同じところで議論できるというような場を、今後も作っていくべきであろう。